

# 女性の同一性について

—測定論的な見地から—

千原雅代

Assessing the Identity of Women

CHIHARA Masayo

## はじめに

女性の社会進出が目立つようになるにつれて、女性のライフスタイルが変化し、様々な選択が可能になってきたことは、昨今指摘される通りである。多くの選択肢に直面して、何をどう選ぶかが“私”というものを確かに感じていく上で重要であることは否めない。

この“私”という感覚は、Erikson, E. H.の提出した“アイデンティティ”という概念で表わされるものに他ならず、現在に至るまで精神分析から広く一般心理学の領域にわたって、扱われてきた大きなテーマである。Erikson, E. H.は、この“アイデンティティ”について、遠大なライフサイクルの理論を立てており、それに基づいた研究が数多く行われてきた。しかし、近年、青年期以降についての彼の理論に基づいた諸研究は、男性をモデルにしたものではないかという批判が現れ始めている。これらの批判は、従来の研究が女性の同一性を十分に捉えていなかったことから生まれたものであるが、従来の研究がどのようなものであるかについては未だ十分論が尽くされていないように思われる。必然的に女性の同一性を捉える研究法も方向を模索している段階にあるといえよう。したがって、ここではまず女性の発達という観点に戻って、これまでの青年期以降の自我同一性研究やそれに関連する領域の研究を概観し、その問題を探るとともに、女性の同一性の研究方法の新しい可能性について考察してみたい。

## I 女性の発達、女性の意識について

女性の発達について、初めて発達的な理論をたてたのはやはり Freud. S であろう。彼はエディプス・コンプレックスの存在を指摘し、それが性によって異なる形をとることを明らかにした。Freud. Sによると、男性はエディプス期にはいると、父親をライバルとして母親を競うことになるが、それは必然的に自分より大きなものとの戦いになり、去勢不安をかきたてる。その

ため男児は母親をあきらめ、統制された世界に入っていかなばならなくなる。ところが女兒の場合は求められるのは父親であり、女兒は母親との間で父親を競わねばならない。母親との関係はライバル関係となるが、男児と父親が明確なライバルとして成り立つのに比べ、女兒と母親との関係は去勢不安のような強力な動因をかくために、それほどはっきりとしたものとならない。Freud. S はこれによって、女性の超自我形成は曖昧になり、道徳も男性に比して発達しないと結論する。

こういった Freud. S の発達論は、女性を男根をもたない不完全者として捉える傾向があるが、これには近年、疑義が差し挟まれている。例えば、Gilligan. C は、道徳発達には6段階あるとする Kohlberg. H の道徳発達の理論を批判し、女性の道徳は男性とは異なった基準をもつと述べている。彼女によれば、道徳発達に関して女性が未熟であるということはなく、男性が最高段階では正義という規範を重んじるのに比べ、女性は他者との関係での道徳を重んじ異なった面がそれぞれ重視されるという質的差異があるにすぎないのである。

このような批判は、Freud. S の超自我形成論の結果として期待されるもの、あるいは Kohlberg. H が最高段階においた論理による統制という考えに大きな修正を強いるものである。それでは、Freud. S や Kohlberg. H の論はどこで、方向を変えてしまったのであろうか。これに答えるためには、女性の発達全体を男性の発達と比べ、相対化させる理論が必要であろう。このような意味で、筆者はここで Jung 派の Neumann. E の説を紹介したい。

Neumann. E (1953) は、精神内界のイメージに注目して神話を引用しながら、女性の発達について語っている。それによると、誕生当初、人間の自我はいまだ生まれておらず、子供は全体性を保った状態にある。これはイメージとしては、自らの尾を咬んで閉じた円をなしているウロボロスによって表わされる。この状態では自我は無意識からまだ独立しておらず、人格全体は無意識の圧倒的な力に支配されている。Neumann. E はこのときの幼児と母親の関係、つまりはまだ幼い自我と無意識との関係を、“本源的関係”となづけている。この状態では、男女の差は存在しない。しかし自我が成長し、子供が母親と自分が人間であることに気づきはじめると、そこには男女で大きな差異が生まれる。つまり男児の場合、自らと母親が別の性に属するという事実を認識するにつれて、母親との間にあった本源的関係は解消されねばならなくなるが、女兒の場合には、母親と同姓であるがゆえに、その本源的関係が基本的には持続することとなるのである。男児は、これによって距離をとって客観化する傾向や、無意識のうちに汝と同一化してしまわない傾向を身につけ、関係を対峙的なものとする傾向をもつようになる一方、女兒は母親との同一視を存続させるため、“同一視の対象となる限り、どんな関係であれそれを強化することになる”のである。ここで男児に課せられる仕事は、太母として顕現するようになった無意識を相手に、英雄として戦いを挑み、勝利を得ることである。これらは個人発生的にも系統発生的にも跡付けられる意識発達上の大きな課題であり、その様相は「意識の起源史」の中で詳細に論じられている。

Neumann. E は、さらに戦いを完全に成し遂げた意識を父権的意識と呼び、それを完全に行わず、男性的なものに侵入されるという形で意識化へむかう意識を母権的意識とよんで区別している。父権的意識の典型は近代西洋の意識であり、主客を明確に捉える、太陽の明るさをもった意識である。このような意識は主・客をはっきりさせ、自らを主体としてより鮮明に構築する。

これに対して、母権的意識は無意識とはっきり切れていないことを特徴とする意識であり、無意識と調和していることをその特徴とする。後者は、認識が無意識から浮かび上がるのを待ち、その認識を受容して全体として変容するという形で働く。また外界に対しては、分析するというよりも、むしろ観照するという態度を有する。このような意識は、父権的意識に比べて主・客の分離がそれほどはっきりしておらず、意識世界を堅固に構造化してはいない。したがって自らの言語化の程度も父権的意識に比べて曖昧と思われる。このような二つの意識は、男性の意識、女性の意識と明確に対応するものではないが、しかし前者は男性において優勢であり、後者は女性において顕著である。

さて、このような論に照らしてみると、Freud. SやKohlberg. Hはどのように考えられるだろうか。斎藤（1983）はFreud. Sのドラの症例を取り上げ、その転移関係について、ドラの女性的なあり方がFreud. Sの父権的なあり方に出会って生じた挑戦だったのでないかと指摘しているが、この見解に筆者も同感である。“女性は暗黒の大陸である”といったFreud. Sは、父権的意識の発達した人であって、そのFreud. Sには、母権的なありかたは見えにくかったのではなかろうか。また、Kohlberg. Hの論を含めてでもあるが、西洋の自我意識からみた見解であるという文化的な差もあろう。いずれにせよ、母権的意識を生み出す発達の道筋は、Freud. SやKohlberg. Hにおいては十分取り上げられず、そういった意識のあり方が考慮されていなかったといつてよいだろう。

それでは、このような意識のあり方は、その他の研究上では、どのように扱われてきたのだろうか。こういった意識のあり方を扱う領域としては、自己概念、自己意識に関する領域と自我同一性に関する領域が挙げられよう。以下ではこれからの領域で、どのような研究がなされてきたのかを概観するとともに、新たな研究方法の可能性を探ってみたい。

## II 様々な研究領域における女性の意識あるいは同一性

### i 自己概念、自己意識に関する領域

この領域に関する研究は、基本的に意識を主我（I）と客我（II）にわけるとW. Jamesの考えに基づいている。中西（1988）は、客我を自己意識と自己概念とに分け、前者は反省意識に現われた自己の全体的イメージ、つまり自分自身に対して現に注がれている意識であり、後者はそれを暗黙のうちに支える基盤的な概念構造であると述べているが、これに従うと自己意識あるいは自己概念は、客観化され、対象化されたところから生じてくる、自らについての一つの経験の構造化された総体に他ならない。筆者はこの点で、自己概念・自己意識という研究領域は、先の二つの意識の差異を捉えることができるのではないかと考えるのだが、これまでの研究はどのように行われてきたのだろうか。以下に簡単に見てみよう。

自己概念、自己意識についての諸研究は先述のような定義に基づいて、様々な側面から実施されてきたが、自己意識がそのときどきに流動する自己イメージと定義されているため、自己意識よりはより安定した自己概念の方が注目を浴びているように思われる。その自己概念については、その主要構成要素を吟味したり（Bugenthal, J.F.T and Zelen, S.L.; 1950; Gordon.C.; 1968; 高垣, 1971）、発達の観点から自己形成過程に言及したもの（Jersild, A. T, 1968:

Wallon, A, 19, Harter, S. 1983), 自己概念の一部としての自己評価, 自己尊心に着目し, その構造を吟味したもの(梶田, 1988), 自尊心と対人関係の関係を調べたもの(Berger, E. M. 1952: Dittes, J. E, 1959: 梶田, 1968: 加藤・高木, 1980)などがある。これらの研究は性差についてほとんど着目していないが, 結果として顕著な性差が得られたものがある。例えば, 梶田(1968)は, 自己評価的意識インベントリーを高校生, 大学生男女に実施し, それを因子分析にかけている。その結果, 自己評価的意識には, 他者のまなざしとの関係における自己評価と自分自身のまなざしのもとにおける自己評価の二つがあり, 前者は女子において, 後者は男子において大きな比重を占めることを見い出している。さらに男子においては, “自分の主張を通すほうである”といった特徴が自己評価意識と大きく関わっているのに比べ, 女子ではほとんど関係が見られない, あるいは“自分に自信をもっている”という項目が, 男子では他者との優劣に関わっているが, 女子では自己受容面と関わっているという結果も見い出されている。また加藤・高木(1980)は, 青年期に注目した研究を行い, 独立意識の発達と自己概念との相関を調べて, 男子では独立意識が高いほど自己概念が安定しているが, 女子ではそのような相関は見られないという興味深い結果を得ている。

これらの結果は総じて自己概念のあり方に差異が存在することを示唆しており, 男性ではそれが他者との競争の中であって, 個の独立, 自己の客観化ということを中心としているのに比べ, 女性では他者との関係に関わっていることを示すものと思われる。また梶田(1968)の得た結果は, 男性の自信が, 他者との優劣というより意識的な世界で築きあげられてくるのに比べ, 女性では自己受容という人格の全体としての調和という側面に関わっているようにも思われる。先に男性にはエディプス期に母親との原初の一体化を解消するプロセスが必須であると述べたが, 以上の結果は男性が母権的な世界から出立するべく, 格闘している様を反映しているようにも考えられる。このような点で, 自己概念という研究分野には新たな発展の可能性があるように思われるが, 先述の通り, 性差に十分な説明を与えた研究は未だに見られていない。また自己概念の構造の相連や, 構造自体の意識的な明確さについては, ほとんど研究がなされていないのが現状であり, 女性の意識を捉える側定的な研究もまだ現われていない。今後, 発展が望まれるところである。

さて以上で, 簡単に自己概念についての理論やそれに基づいた側定方法について概観した。今後は関連する領域として自我同一性に関する研究分野に視点を転じ, そこでの女性の意識のあり方にせまる研究を拾ってみたい。

## ii 自我同一性研究に関する領域

自我同一性という概念が Erikson, E. H.によって提唱されたことは周知であろう。Erikson, E. H.は, Hartmann, H.の自我心理学の流れを引き継ぎ, 自ら青年期にヨーロッパを渡り歩き, ユダヤ人としてアメリカに移住した体験をもとに, 自我同一性という概念を提唱したといわれている。Erikson, E. H.はこの概念を, 精神分析的な自我心理学の枠をはるかに越えて, 民族同一性といった問題にまで言及するほど拡張し, その形成過程についてライフサイクルの理論をたてた。その概念の広がりやを反映して, 自我同一性に関する研究は, 精神病理学的な研究から比較文化的な研究にいたるまで, 膨大な数にのぼっている。ここではそのうち, 自我同一性を“自

己の連続性（continuity）と斉一性（sameness）が自分に直接的に知覚され、また他者が自己の連続性と斉一性を直接的に認知しているという同時的な知覚”という定義に基づいて捉え、その側定を試みた研究や、ライフサイクルの理論に基づいてその獲得について論じた研究を取り上げ、その背後にある理論的な方向付けについて論じることにしたい。

それではまず、測定論的に研究に目をむけることにしよう。自我同一性の測定は質問紙によるものが一般的だが、中でもよく用いられるのは Rasmussen (1961, 1964) の同一性質問紙であろう。これは Erikson, E. H. のライフサイクルの理論に基づき、第 6 段階の成人期までの発達課題に関する項目を收拾して作成されたものである。この日本語版の作成は、鏑ら (1981) によって試みられており、信頼性・妥当性ともに吟味されている。また日本独自のものとしては、自己信頼感、目標の設定、対人関係の保持、情緒的安定性、自分に対する容認という 5 つの内容を仮定したもの (古沢, 1968)、その項目の因子分析を行ったもの (大村, 1971) や、測定上の簡易さを狙った Tan, A. L. (1977) をもとに 12 対 24 項目の中で、強制選択を行なわせるもの (田端, 1978, 1981)、あるいは Rasmussen (1964) と同様の視点にたち、ライフサイクル論に基づいて、よりはっきりと発達課題を打ち出したもの (遠藤, 1981)、青年期の同一性混乱を捉えようとしたもの (砂田, 1979) などが挙げられる。このような質問紙は、発達の観点、実存的観点、と様々な立場に立って作成されているが、概ね自己あるいは他者への信頼、自己確信、未来への展望などの点では共通する内容をもったものとなっている。しかし細かく見ると特筆すべき相違も見いだされる。それは青年期以降の項目について、個々の研究者が Erikson, E. H. の提出した自我同一性達成という課題をどう解釈したかによって、項目がかなり変わってきているという点である。例えば、Rasmussen (1964) は第五段階に相当する項目として、自己の容姿の受容、他者から認められることへの欲求などを取り上げているのに対し、遠藤 (1981) は、自己確信、集団に埋没しないあり方、未来への確かな歩み、価値観の選択などをあげている。また砂田 (1979) が同一性混乱尺度としてあげているのは、時間的展望の拡散、自意識過剰、労働麻痺、権威混乱、価値混乱などである。もう少し詳しく述べると、例えば遠藤 (1981) は、この発達課題のうち“社会との関わりの中での特定の役割や価値観の達成”を重視し、“子供のしつけや習慣形成ということは、機械化時代に順応できるよう歯車化し、規格化することに他ならないと私は信じている”あるいは“青年期までに私が身につけた役割や技術を現代の理想的な行動様式にどう結びつけたらよいか、私は非常な悩みを感じている”といった項目をあげているが、Rasmussen (1964) にはこういった内容のものはなく、むしろ他者による受容を問う“私のやり方は他人に誤解を受けることが多い”といった項目が散見される。また砂田 (1979) には“一かどの人間になろうとする希望を失いそうになる”、あるいは“機会があっても私はよい指導者にはなれそうにないだろう”、“私は確固とした政治的意見をもっている”といった項目があがっている。これらは総じて自己確信、価値選択、将来への展望という Erikson, E. H. の記述のもとに選択されているが、そこに個々の研究者の立場やその時代の価値観が入り込む結果となっているように思われる。例えば、価値選択として砂田 (1979) は政治的意見、社会観を含め、遠藤 (1981) もイデオロギーに近い主義をあげているが、筆者には、価値選択としては対象とされる“価値”の範囲が限定されているように思われる。Erikson, E. H. が価値選択という時に意味したものは、青年期における周囲の世界の再体制化の結果、新たに生み出された世界観、人生観と

いうべきものである。それは意識的な世界の構造化のみにとどまらない人格全体の再体制化であり、精神分析的に述べるならば、自我の無意識との関係の再編であるといえよう。Erikson, E. H.が同一性拡散として捉えた人々は、現在では精神病理学的に境界例と診断される病理をもっていたと言われることを考えあわせると、同一性達成を先の質問紙で捉えたような価値観の確立とすることは、自我同一性概念の内包する意味を削減することとなろう。一步進んで言えば、自我同一性概念をこのような形で解釈する背後には、自我確立の神話がひそんでいるようにも思われる。つまり、青年期に必須となる“同一化の再体制化”が自我があらたに世界を広げる過程であることは明らかなが、実証的な研究レベルにおりたときに、それが客観化・分析によって堅固に意識世界を構築すること、つまりは父権的な世界を確立することと等しく捉えられているのではないかと考えられるのである。

このような前提は、Marcia, J. E (1964) の考案した同一性地位面接においてよりはっきりした形で現れている。この同一性地位面接を行ない、職業とイデオロギー（宗教、政治）の領域において、危機を迎えたか否か、迎えた場合には積極的に悩んだか否かという、危機（Crisis）と積極的関与（commitment）の二つの基準から同一性達成について、4つの地位に分類するものである。この方法は同一性獲得の過程がひとつの危機であることを際立たせ、それを力動的にとらえることを可能とした画期的なものであった。これに続く研究は相当数のほり、“同一性達成”、“同一性拡散”、“早期完了”、“モラトリアム”という Marcia, J. E の4つの地位以外にも、“分裂的拡散型”など様々な地位が生み出されている。しかしながら、一つの問題となるのは、こういった地位決定を行なう際に問題とされるのが、職業、イデオロギーという領域であることである。Neumann, E は、自我が無意識から独立すると、無意識の投影が減少し、客観性が支配する世界がうまれるとのべているが、宗教的価値観、政治的意見は理論的に構成された世界に属するものである。この点に父権的な世界観が前提されていることが顕著に表われているとはいえないだろうか。

実証的な研究を見てみると、このような考え方に一致する結果を得ている研究がだんだん増えつつある。Shenkel, S. and Marcia, J. E (1972), Waterman and Nevid (1977), Hodgson and Fisher (1979) などがその一例である。Shenkel, and Marcia, J. E (1972) は、従来の領域に、婚前交渉に対する態度という性の領域を加えて面接を行ない、女性の場合、性の領域で決定された同一性地位がもっともよく自尊心や不安を判別するという結果を得た。また Waterman and Nevid (1977) も、性の領域で顕著な性差を見だし、特に女性ではこの領域での危機が重要課題となっていると述べている。さらに Hodgson and Fisher (1979) は、性の領域に性役割に対する態度を加えて同一性地位面接を行ない、男性では職業、政治、宗教の領域で達成、モラトリアム型が多いのにくらべ、女性では性に関する領域でこの二つの地位が多いとしている。つまり、これらの研究は共通して、男性では政治、宗教、職業といった領域が同一性達成に重要であるのにくらべ、女性では性の領域が重要であるという結果を得ているのである。また、Hodgson and Fisher (1979) の研究では、さらに政治、宗教、職業に関する領域での同一性達成を男性経路、性、性役割に関する領域での同一性達成を女性経路とし、同一性達成型をそれぞれの経路別にして、自尊心の比較検討が行なわれている。それによると、男性では男性経路で、あるいは両方の経路で同一性達成をした者が最も自尊心が高いが、女性では女性経路をた

どった者が最も高いという結果が得られている。つまり女性は男性と同じように男性経路で同一性を達成することが、必ずしも自己肯定に通じるわけではないということが示されたのである。これらの一連の結果は、女性にとっては、意識的な観念世界におさまりきらぬものが問題となっていることを示している。従来の研究はこのような点をとりあげず、男性の意識的発達という観点からなされていた点で一面的であったといわざるを得ない。

それでは、女性にとって重要となっているのはどのような問題なのだろうか。同一性地位面接でとりあげられたのは、婚前交渉に対する態度と性役割に関する態度という領域であった。Hodgson and Fisher (1979) は、この研究の中で同時に親密性についても吟味し、男性では同一性達成型が最も親密性が高いのに比べ、女性ではどの地位でも親密性が高いという結果を得ている。彼らはこの結果をふまえて、男性にとって同一性達成には有能性 (competence) と知識 (knowledge) が重要だが、女性にとっては関係すること (relating), つまりまわりの人々との関係が重要であるとのべ、性の領域もこのような“関係すること”を反映しているのではないかと示唆している。また、やや視点は異なるが、Erikson, E. H. (1968) は「女性と内的空間」という論文で、“女性にとっては、その内的空間が望んで保持したいと思うものを見いだすことが課題である”と述べており、内的空間を満たすという形での対象との関係のあり方に注目している。ここで Erikson, E. H. が取り上げたのは、Neumann, E. が女性の発達について指摘している“本源的関係を繰り返し求めようとする傾向”ではないだろうか。Jung 派はここから“神秘的融即”が生まれるとしているが、このような関係のあり方は一般には母性といわれる性質に表わされる関係のあり方ときわめて近いものと考えられる。その意味では、Marcia, J. E や Hodgson らが取り上げた性の領域、性役割に関する領域は、母性の問題を底流させているのではないかと考えられるのである。さて、それではこのような母性に関わることも含めた場合、どのような同一性測定の方法がありうるだろうか以下では、この点について考察してみたい。

### Ⅲ 女性の同一性測定の可能性について

これまでのところでは、男性と女性の発達の相違について述べ、従来の研究が父権的意識の発達を遂げる西洋的な男性の意識を対象とする傾向をもっていたことを指摘し、女性にはそれとは異なる母権的意識が存在すること、そこでは母性が問題となってくることを示唆した。それではこのような女性の意識のあり方を捉えるのにどのような研究がありうるだろうか。

方向としては様々な可能性があり得よう。例えば Hodgson and Fisher (1979) のように新たな領域をもうけて、女性にとって重要な領域を特定化していくのも、女性の同一性の多面性を捉えるのに有効な方法であろう。

これとは別に、筆者はここで Erikson, E. H. の同一性の感覚という概念をもう一度とりあげてみたい。Erikson, E. H. (1959) は健康なパーソナリティの発達を論じる中で、たびたび同一性の感覚 (sense of identity) という言葉を用いている。Erikson, E. H. によれば、同一性の感覚とは“内的な不変性と連続性を維持する各個人の能力 (心理学的な意味での個人の自我) が他者に対する自己の意味の不変性と連続性とに合致する経験からうまれた自信のことである”。これはそれぞれの主要な危機の終わりに確認された自己評価 (self-esteem) でもあり、絶えず修正

されていく現実の感覚でもある (Erikson, E. H. 1959)。

Erikson, E. H.は自我同一性という概念を提出したさいに、客体としての様々な自己対象の中から有意義なものを選択し、次第に一つの同一性へと収斂させていく機能は自我によって営まれるのであり、この意味でそれは自我同一性とよばれるべきであるとのべているが、同時に同一性という概念の中には主体としての自我の見地と、客体としての自己の見地が存在するとも述べている。自己の概念について明言はなされていないが、それは一つの中枢機関としての機能を与えられており、自我に対して、生涯にわたって様々な自己 (selves) を統合するように要求するものとして考えられている。自我同一性とは、この意味では、自我がこのような自己との間に調和を生み出した結果、獲得されるものになるということになる。換言すれば、Erikson, E. H.の自我同一性という概念は、様々な形での意識と無意識の調和を含み得る包括的な概念であるということになる。また、このような調和が存在するときに感得されるのが、同一性の感覚ということになる。

ただ Erikson, E. H.自身も、自我同一性という概念をやや方向づけて用いている場合がある。例えば、Erikson, E. H. (1959) は、成人期の課題である親密性の危機について、同一性の達成できていない場合には、親密さが他者との融合へと変貌することを恐れる余り、他者と適切な関係がもてなくなるという。こういった記述には、男児が母権的な世界から出立すべく格闘している様が重ね合わされていると考えられ、自我同一性達成が父権的意識の発達への方向づけられていると思われる。また女性の心理についての内的空間論がライフサイクルの理論に組み込まれていない点からも、この期あたりの自我同一性概念に、女性の同一性や母権的意識のあり方が十分考慮されていないように思われる。しかし一方、女性の自我同一性を論じる中では、女性の猶予期間は自らの内的空間が「心から」歓迎するものを選ぶことができるようになったときに終結するとし、その際の満足感や、逆に満たされなかった場合の空虚感について言及している。このような自我同一性の捉え方は、父権的意識の発達から離れて、むしろ内的空間という生物学的所与、つまり自我にとっては大半は無意識にとどまる要因に基づいているといえよう。このような自我同一性が感覚として記載されたのもうなづけるところである。

さて、このような状況を振り返って見た場合、筆者は自我同一性の内容をライフサイクルの理論に従って選定し、同一性側定を試みる他に、同一性の感覚そのものに焦点をあてる研究法が必要だと考える。

従来の研究を振り返って見ると、作成された意図は様々なが、このような研究が散見される。以下に幾つかとりあげてみよう。Dignan, M. H. (1963, 1965) は、女子大生の母親との同一視と自我同一性の関係を調べるため、同一性の感覚に注目した尺度を構成した。それによると同一性の感覚は、自己感覚、独自性、自己受容、対人役割期待、安定性、目的指向性、対人関係の7つの下位尺度によって側られている。また Baker, F. (1971) は Erikson, E. H.の定義に従って、同一性の感覚を①自分が誰であるかわかる、②自分の方向性がわかる、③自己の斉一性と連続性を自覚している、④自己認識と他者認識が一致している、という4点から捉え、32項目からなる尺度を作成している。また日本の研究では、Dignan, M. H. (1963, 1965) を参考にして、自己信頼感、目標の設定、対人関係の保持、情緒的安定性、自己容認という5つの尺度を仮定し、TPI (東大式パーソナリティ検査) から38項目を抽出した質問紙を作成した研究 (古沢, 1968)

がある他、古沢（1968）の下位尺度に相当する項目をMMPIから収集して因子分析を行い、情緒の安定と自我に関する因子、自己変革に関する因子、対人関係に関する因子の3因子を見出した研究（大村、1971）などがある。

これらの研究はいずれも同一性の感覚をほぼ同じような定義から捉えようとしているが、Dignan, M. H. (1965) の対人関係の下位尺度のように、自我の統合機能を離れて自己像の把握に傾いているものがあったり、Baker, F (1971) のように、項目が主義、主張を測るものになっていたりする。また古沢のように下位尺度を定義しながら項目の妥当性に問題がある場合もある。Erikson, E. H.自身がのべていた同一性の感覚は、なによりも自我が健康な自己愛のもとに発達的危機をのりこえて身につける内的な感覚であり、“表層と深層、意識と無意識の双方にまたがっている、実証可能な無意識的な内的状態”である。端的にいうなら“健康であるという感じ”、“なにかがうまくいっていない感じ”といった言葉で表わされる内的な感覚なのである（Erikson, E. H., 1959）。従来の研究はこういった同一性の感覚を多面的に定義しながら、実際の項目収集の段階で、内的感覚からずれてしまい、他の自我同一性質問紙に結果的に類似するものとなっている。

このような現状をふまえて、筆者も同一性質問紙の作成を試み、性差を検討した。以下ではそれを紹介しながら、女性の同一性とその測定について考えてみたい。

筆者は、Dignan, M. H. (1965) を参考に、①自己感覚、②独自性、③目標指向性、④安定性、⑤自己受容性の5つの尺度を仮定し、それぞれに10項目を収集した。それを男性173名、女性198名、計371名に実施、7件法で回答を求めた。その結果を因子分析（主因子法、バリマックス回転）にかけたところ、男女ともに同じ因子構造を示し、4因子抽出された。第1因子は独自性と安定性の項目からなり、人に呑み込まれず、多少のことでは動じないようなあり方を測るものとなっている。この意味で第1因子は自己の核に関する因子と考えられよう。第2因子は目標指向性（自分が進んでいく方向がわかっていると感じる）、第3因子は自己感覚（自分はこうだというものがある）、第4因子は自己受容（今のままの自分でいいと思う）の項目がそれぞれ0.5以上の負荷をもって現われた。因子構造に性差がなかったことから、男女いずれにおいても同一性の感覚は、自己の核を中心にしてなりたつような等質のものである点が立証されたといえよう。

しかしながら、下位尺度ごとに合計点を算出し、男女それぞれの平均点をt検定にかけたところ、自己の核に関する尺度と独自性の尺度では、男性の得点が有意に高かったが（0.1パーセント優位）、目的指向性、自己受容性では有意差は見られないという結果が得られた。従来の自我同一性質問紙で性差が報告された例は見られないことを考慮すると、これは興味深い結果といえよう。このような結果を得ることになった原因の一つに、男女の意識の明確さの相違ということが考えられるのではなかろうか。第1因子、第3因子はいずれも、自己が意識的に把握されていることを前提としている。先に男女の発達について述べ、男性の場合には、自己の客観化がより発達しているのではないかと示唆したが、このような客観化は心然的に言語化をとまなうものである。従って、男性の方が、よりはっきりと自分というものが感じられることになり、このような結果をもたらしたのではないかと思われるのである。この研究では、同一性と親密性の検討があわせて行われ、男性の自我同一性は他者から分離する在り方に大きく関わっているが、女性ではそのような関係が見られないという結果も得られている。その際、自我同一性の下位尺度のな

かでも、独自性に関する因子が、最も性差を反映していたが、この点からも同様の意味付けが可能となろう。

さらに自己受容尺度に目を向けてみよう。性の受容と生まれ変わりの性についての質問によって被験者を4タイプに分け、この4群で同一性得点について、下位尺度ごとに分散分析を行なったところ、男女いずれともに、自己受容尺度が、4群の差を最もよく分別した。特に男性の結果を見ると、他の下位尺度得点では、性を受容し、今後も男性に生まれ変わりたいと考える人(第1群)が最も高得点を得たのに対し、自己受容尺度のみで、性を受容しているが生まれ変わるときには異性を望む人(第3群)が最も高得点を示した。自己受容尺度は、より言語化されにくい自己感情といった内容をもつ尺度であるが、このような結果からはこの尺度が、他の尺度とは異なる層を測った可能性を示唆しており、今後の同一性感覚の研究を勧める上で興味深いものとなっている。

### おわりに

これまでのところでは、男女の発達理論に言及し、その視点から従来の自己意識、自我同一性研究を展望、あらたな女性の同一性測定の可能性について論じてきたが、女性の意識発達について十分、取り入れて論じることができなかった。現代のように男女同じく教育を与えられる社会においては、女性も意識発達を遂げねばならず、そこに様々な問題が生み出されている。仕事が結婚かという葛藤はよく指摘されるところだが、それは背後に母性的な世界からどのように出立し、意識化していくかという課題、あるいはJung派流にいうならばアニムスをどのように育てていくかという課題をひそませているように思われる。このように複雑となった女性の同一性をどのように捉えていくかは、また別の検討を要する大切な問題である。また、男女の発達について象徴的な母親殺しという点から、その相違を論じてきたが、ここには文化的な要因も大きく関わることはしばしば指摘されてきたとおりである(河合, 1982)。この点も、日本人の性同一性形成を考える上で、今後、検討を要する問題として、同時に考えていかねばならないと思われる。

### 引用文献

- 1) 千原雅代 (1990) 青年期後期から成人期にかけての自我同一性の性差に関する研究 日本教育心理学会第32回大会発表論文集 p. 245.
- 2) Dignan, M. H. (1965) Ego Identity and maternal identification. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 476-483.
- 3) Erickson, E. H. (1950) *Childhood and Society*. New York, Norton. 仁科弥生(訳) (1977, 1980), 「幼児期と社会」, みすず書房
- 4) Erikson, E. H. (1959) *Identity and the Life Cycle*. International University Press. (訳) (1984), 小此木啓吾, 「自我同一性」, 誠信書房
- 5) Erikson, E. H. (1968) *Identity-youth and crisis*. New York, Norton. (訳) 岩瀬庸理, 「主体性—青年と危機」, 北望社
- 6) Erikson, E. H. (1976) *Toys and Reasons*, New York, Norton. 近藤邦夫(訳) (1981), 「玩具と理性」, みすず書房
- 7) 遠藤辰雄 (1981), *アイデンティティの心理学*, ナカニシヤ出版

- 8) Hodson, J. W. and Fisher, J. L. (1979) Sex differences in identity and intimacy development in college youth. *Journal of Youth and Adolescence*, 8, 37-50.
- 9) 加藤隆勝・高木秀明 (1980) 青年期における独立意識の発達と自己概念の関係 *教育心理学研究*, 28, 336-340.
- 10) 河合 隼雄 (1982) 昔話と日本人の心 岩波書店
- 11) Marcia, J. E. (1966) Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 3, No. 5, 551-558.
- 12) Marcia, J. E. (1967) Ego Identity Status: Relationship to change in self esteem, general maladjustment, and authoritarianism, *Journal of Personality*, 35, 119-133.
- 13) Marcia, J. E. and Friedman, M. L. (1970) Ego Identity Status in College Women. *Journal of Personality*, 38, 249-263.
- 14) Neumann, E. (1953) *Zur Psychologie des Weiblichen*. Rascher an Cie. 松代洋一・鎌田輝男 (訳) (1980) 「女性の深層」紀伊国屋書店
- 15) Neumann, E. (1956) *Amor and Psyche*. Kegan Paul. 河合隼雄 (監訳) (1973) 「アモールとプシケー」紀伊国屋書店
- 16) Neumann, E. (1971) *Ursprungsgegeschichte Des Bewusstseins*. Walter—Verlag AG Olten. 林 道義 (訳) (1985) 「意識の起源史」紀伊国屋書店
- 17) Orlofsky, J. L. and Marcia, J. E. and Lesser, I. M. (1973) Ego Identity Status and the Intimacy versus isolation of Personality and Social Psychology, 27. No. 2, 211-219.
- 18) 斎藤 久美子 (1983) 性アイデンティティ 岩波講座 精神の科学 5 食・性・精神 175-220. 岩波書店
- 19) Schekel, S. and Marcia, J. E. (1972) Attitude toward permarital intercourse in determining ego identity status in college women. *Journal of Personality*, 40, 472-482.
- 20) 細木照敏 (1983) 「青年期心性と自我同一性」精神の科学 6 181-209, 岩波書店
- 21) 砂田良一 (1979) 自己像との関連からみた自我同一性 *教育心理学研究*, 27, 215-220
- 22) 鐘幹八郎他 (1984) 自我同一性研究の展望 シンポジウム青年期 3 ナカニシヤ出版
- 23) Waterman, C. K. and Nevid, J. S. (1977) Sex differences in the resolution of the identity crisis. *Journal of Youth and Adolescence*, 6, 337-342.

(博士後期課程)